

第10章 夫婦の会話

何となく、

今年はやい事あるごとし。

元日の朝晴れて風無し。

石川啄木

「鳥居^{とりい}」 夫婦の会話

『まつ赤な秋』という歌に鳥居がでてくる。♪お宮の鳥居をくぐりぬけ……

「鳥居がほしいわ」「ほしくない」

「鳥居を買いましょうよ」「買いません」

「赤がいいかしら、白がいいかしら」「どちらもいりません」

「赤だったら楽しいかも」「楽しくない」

「京都で見た平安神宮の朱色の大鳥居がいい」「あれが倒れて来たら死ぬ」

「NHKテレビ『所さんの大変ですよ!』で、水道管で安く作れると言っていたわ。個人の注文も増えているそうよ。一つ作ってもらいましょう」「必要なし」。

「つうかあ」 夫婦の会話

春一番がふいた。「わーおん わーおん」と、のら猫が鳴きながら家の周りを巡っている。

「今度の猫は『ダンシ』と名付けたのよ」。すると高校の生物の教師をしていた夫が、「春ですね」と言った。「つう」と言えば「かあ」の時もある。めったにないので感動した。

「白いムラサキツユクサ」 夫婦の会話

「白いムラサキツユクサが咲いたわ。白はとても珍しいのよ」

「午前咲いて、午後つぼんでしまうから、午後は花を見ることができない」

「白くてもムラサキツユクサとはこれいかに」

「おしべが紫色だからさ」「本当だ、知らなかった」

「ところで、高校の顕微鏡の実験で、ムラサキツユクサを使うからお寺にもらいに行つた事があつたでしょう、お寺の庭師のおじさんが、『トラックで来い。いくらでもやるよ』と言つたのよ。」

おかしいでしょう。自転車のカゴに、二、三株もらって来て、家に植えたのは育っているわ。これがそうよ」

「学校へ持って行ったのは、すぐ枯れた。日かげに植えたからでしょうか」

「エッ、ムラサキツユクサを枯らしてしまったの」。

「オリンピック出場」 夫婦の会話

「オリンピックに自転車で出たいわ」「ありえない」

「それが、あるのよ」「ない」

「いつだったか、ある夏の昼下がり、ウチにだれもいなくて暇だったからテレビをつけたらオリンピックをやっていたの。いつのオリンピックかハッキリしない。各国の三十人ぐらいの選手が自転車で何周かして、最終ゴール手前の坂に来た。先頭の選手が金メダルと思いきや、なんと転倒した。後続の選手が巻き込まれて、みんな転倒した。それで、どうなったと思う」「さあね」「後ろから二番だった選手が一位になり金メダルだったのよ。ラストの選手は銀メダル。あとは転んだ選手が起き上がり団子状態でかけぬけた。だから、私も二十インチの自転車を出てみようかと思っているのよ。夢は叶うかしら。この話は、まだ、だれにもしていない」「変な事を、よく覚えている人ですね。童謡の会で話さない方がいいですよ」「そうだね」。

「昔の遊び」 夫婦の会話

「ソソソソと鳴いたのは何かしら?」「さあね、聴こえせんねえ」

「ほら、今、ソソソソって鳴いたでしょう。オケラかしら」

「オケラは鳴きません」

「昔、オケラを捕まえて、『おまえのかあちゃんのオツパイどれくらい大きい』と訊くと、手というか、触角というか足かで、これくらいって示す遊びをしたよ。オケラだったか、コメつきバツタか、バツタじゃあなくて、コメつき虫かな、胸の所から折れてカクンって音がするの」

「訳のわからない話ですね。でも、おもしろそうな遊びですね」

「昔、やったでしょう?」

「僕は小さい頃から虚弱体質で家にいて、外遊びはあまりしなかった。引きこもりでした」

「引きこもり? 本ばかり読んでいたのでしょ」

「アパートの子どもたちと缶けりをした思い出がある」「それって普通だよ」。

……

「夏休み、ラジオ体操が神社の境内であって、始まる前に地蜘蛛じぐもを地面から引き出して並べ、だれが一番長いのを引き出したか比べたりしたよ」

「その話は何度も聞いた」

「みんな夢中になって競った。息を殺して引いても、ほとんど途中で切れてしまい、切れた子

は悔しがった。『もう一回、もう一回！』と言い、その悔しがり方がすごかった。「楽しそうだね」
「三十センチぐらい太いのもあった」「そんなに長い地蜘蛛はいません」
「子どもだったから長く見えたんだね」「記憶のなかで膨らむ」
「何本も地蜘蛛の袋が並んだ。地蜘蛛にとつては、迷惑な子どもたちだったね」
「地蜘蛛で遊んだ子は、きっと地蜘蛛の事を覚えているよ」「そうだね」。

「中原中也」 夫婦の会話

「中原中也の詩に『汚れつちまつた悲しみに』というのがあるでしょう」

「今日も小雪の降りかかる」

「汚れつちまつた悲しみ とは、いったい何かしら」

「さあねえ」

〈汚れつちまつた悲しみは なにのぞむなくねがふなく〉

「こんな言葉を思いついた中也は天才だわ」

〈汚れつちまつた悲しみに なすところもなく日は暮れる……〉

「Eテレの朝の子ども番組『にほんごであそぼ』で、歌って踊るのよ。なぜ、子ども番組でとりあげているのでしょうか」

「……」。夫はもう寝ていた。

深い悲しみの歌なのに、何度も聴いていると歌いたくなる踊りたくなる、楽しくなる。中也と歌い踊る、楽しい。

〈汚れつちまつた悲しみに 今日も風さへ吹きすぎる。〉

◆平成二十八年のノーベル文学賞は、ボブ・ディランが受賞した。その人生は自由で悲しい。湧き上がる言葉は、だれにも理解されない。理解されたくない。子どものような、わがままの塊かたまりの男ボブ・ディランは、中原中也のようだ。

「ほしいもの」 夫婦の会話

「ヤギがほしい」

「ヤギを買いましたよ」 「何にするんだい」

「草を食べてもらうのよ。そうすれば、草刈りに年末に出費しなくてすむわ。先日、松田の高校の裏手の草原に、やせたヤギが放牧されていて、草を食べていたのよ。これはいいわ、と思ったの。いかが」 「買いません」。

「小さい頃、家で飼っていたのよ。よぼよほの年老いたヤギのチチは、非常にまずかった」

「臭かっただろう。ヤギは飼いません。死んだ時、かわいそうだ」「そうだね」。

ヤギのチチは体にいいと言われているので、父と母は、健康維持のため飼っていたのでしよう。私が幼稚園に入学する頃には、もういなかった。

「核シエルター」がほしい

「核シエルターを造りましょうよ」「いりません」

「北朝鮮の新型中距離弾道ミサイル「北斗星2」の発射とか核実験といった不測ふそくの事態にそなえるのよ」「必要ありません」

「いつ、お魚を釣っているユリ坊の頭の上に落ちるかわからないよ」。

平成二十九年五月二十日、夜九時からNHKスペシャル『北朝鮮』という番組で、「北朝鮮は核弾道ミサイルの攻撃能力を高めている」「ICBMの完成間近か」「これを撃ち落とすことはきわめて困難」と言っていた。

「相撲なんか、のん気に観ていいの。拉致問題が頓挫してしまった。困ったものです」「そうだね」。

「北條五代祭り」 夫婦の会話

美容室で、「今年（平成二十九年五月三日）の北條五代祭り、盛大でしたね。年々大きくなりますね。私はテレビで観ましたよ。高嶋政伸君も来てくれて、よかったですね」「お祭りが通るこの辺のお店は、閉めてしまいうんですよ」「NHK大河ドラマの政伸君の演技、上手でしたね」「そうですねですか」。あれ、美容師さんは、『真田丸』を観ていなかった。とても面白かったのに見逃

したとは残念だった。

帰宅して、早速夫に話した。「政伸君の演技、上手でしたねと言ったら、美容師さん、観ていなかったのよ」すると夫が思いがけない事を言い出した。

「あの演技は、うまくない」「エッ、あなたも『真田丸』を観ていなかったの?」「時々観ていた」「白目をむき出しにしたり、食べ物とのシーンでは食べ方を工夫していたし、顔の白塗りもよかった。今まで四代氏政役をやった役者さんの中では、一番よかったわ。『うまい』と言わないのなら、何と言えればいいの」「そりゃあ、ひいきの引き倒しですね」。

「社会貢献」 夫婦の会話

「小学生の頃、道路愛護というのがあって、ゴミを拾ったり、ホウキで掃いたり、穴のあいた所に土や石を入れて修復したりしたのよ。山形ではなかったの?」「さあね」

「この道路愛護の最後の日、ラジオが来て、アナウンサーがマイクを向けたの。私たちは逃げたのに、六年生の男子が「中学生になっても、手伝える時は参加したい」と、堂々と答えていて立派だったのを覚えているわ。あの子は今頃どうしているだろうか」「その子は、すばらしい」

「それを思い出して、新聞受けに新聞を取りに行くついでに、毎日私が道路を掃いているのを知っていますか」「知らない」

「山形のお父さんが言っている社会貢献よ」「それはいいですね」

「でも、掃いたとたんに犬を連れた女がタバコを捨てて通るのよ。きれいになったばかりの道に、タバコのポイ捨ては、きつと気分がいいでしょうね」「ひどい話だ」。

「歯科医院」 夫婦の会話

「虫歯と想っていた黒い所は茶渋という事で磨いてもらった、よかった。ところで、あなたは歯科検診に行かないの、葉書が来るでしょ」「来たけれど、行きません」

「どうして、せっかく葉書を書いてくれるのに。葉書を持って行くと歯ブラシがもらえるのよ」「葉書は受付の人が書いてくれているのを知っています。でも行きません」

「歯医者が恐いの」「ガリガリやられて痛い。磨くだけでも痛い。子どもは泣いて暴れることができるけど、大人はそうはいきません」

「あたりまえでしょ。痛いのがいやなの?」「そうです」

「私が小さい頃、暴れるので、母が『診察イスの肘掛ひじかけに力を入れてつかまっていれば、痛いのが我慢できる』と教えてくれたわ」「今は、診察台には肘掛ひじかけがありません」「そういえば、ないね」

「ゆり坊が付き添って行ってあげるよ。ミギー(寄生獣)も一緒に行くよ。ジバニャン(妖怪ウオッチ)も呼ぼうか」「それって、みんな妖怪ですね。弱そう」

「ジバニャンは好物のチョコポーを買ってあげれば来てくれるよ。チョコポーはスティック

状のチョコスナック菓子だよ。ジバニヤンは、楽しい時も悲しい時も苦しい時もチョコボーを食べている。サクサクした触感が美味しい」

「虫歯が多そうだね。ゆり坊は、出産の時、歯がボロボロになったね」

「子どもに栄養を取られ、カルシウム不足。みんなで行けば恐くないヨ。行きましょよ」
「行きません」。

「字幕スーパ―の間違い」 夫婦の会話

「字幕スーパ―の間違いが多いわ」「そうだね」

「なぜかしら？ 好きなアナウンサーが、読み間違えたわけではないのに、字幕の漢字の間違いを謝ってばかりいるわ」

「きっと能力のない、だれも文句を言えないような偉い人がやっているのさ」。

「前人未到」の間違い

平成二十九年六月二十六日の将棋のテレビ中継を、日本中が「勝利はまだか、まだか」と見守った。最年少中学生棋士・藤井聡太四段（十四歳）対増田康宏四段（十九歳）。午前十時に対局が始まり、午後九時二十四分、藤井四段が九十一手で勝って公式戦の新記録となる二十九連勝を達成した。

藤井四段は、愛知県瀬戸市出身。名古屋大学教育学部附属中学校三年在学。昭和六十二年、神谷広志八段（五十六歳）が樹立した二十八連勝を三十年ぶりに塗り替えた。歴代一位記録保持者になった。

翌日のNHKテレビ『おはよう日本』で、女性アナウンサーが、自分が原稿を読み間違えたわけではないのに、「昨日の藤井四段のニュースの中で、字幕が間違っていました。×「前人未踏」は、○「前人未到」でした。訂正してお詫びします」と、あやまった。

神奈川新聞は、六月二十七日の新聞一面で、「二十八連勝は将棋界で「不滅」の大記録とされてきた。社会現象にもなり、快心撃を続ける中学生棋士が、プロデビューからわずか半年余りで前人未到の偉業を成し遂げた」と書いた。

しかし、大見出しが『未踏29連勝金字塔』と間違っていた。あきらかに文と、大見出しを書いた人が違うことがわかる。テレビの字幕担当者と同じように新聞も大見出しだけを担当している人がいるようだ。これは、いけなかった。神奈川新聞、痛恨のミス。二十八日の新聞では訂正とお詫びの記事はなかった。

◆「未到（みとう）」Ⅱ業績・記録。まだ行きつかないこと。前人未到の境地。

「未踏（みとう）」Ⅱ土地。人がまだ足をふみ入れていないこと。人跡未踏の奥地。

「声楽」の間違い

平成三十年六月九日、神奈川新聞で横浜市の六十一歳の女性の投書『オペラ発表会に拍手喝采』

に間違いを発見。「オペラの声学発表会がありました。」と書いてある。×「声学」は間違いで、○「声楽」が正しい。投書欄は新聞社の編集が目を通して、内容や誤字のチェックをしている。書いた人も編集者も、日常生活に音楽が無いのかもしれない。私は、音楽は教養と思っている。

「短い」の間違い

平成二十九年六月二十七日、NHKテレビ『ニュース7』を観ていると、女性のアナウンサーが、「先ほどのニュースの中で、字幕が間違っていました。×「短かい」は、○「短い」でした。訂正してお詫びします」と、あやまった。私は、またかと思った。子どもも観ている。知っている。いったい何のニュースだったのでしょうか。

気になるので新聞を調べた。『北方領調査始まる』『官民六十九人水産加工場など視察』のニュースがあった。準備していた元住民の墓参はどうなったのだろうか。墓参については、神奈川新聞にも読売新聞にも書いてなかった。

「北方領土返還」は、昔からの日本の悲願だった。プーチン大統領は「国後島」くわしり「択捉島」えとろふ「色丹島」しこたんの返還を考えてもいいと言った時期もあったが、北朝鮮・韓国・中国の情勢の変化にともない最近では、北方領土を返還すれば米軍が駐留する可能性への懸念を繰り返し示している。

私は、沖繩に米軍基地があるかぎり、北方領土返還は無いと思っっている。「高齢になっっている元住民に、短い滞在でも渡航許可をお願いしたい」。

「加熱」の違い

平成二十九年七月十三日、『ニュース7』を観ていると、女性のアナウンサーが、「字幕が間違っていました。」×「過熱」は、○「加熱」でした。訂正してお詫びします」と、あやまった。

私「何のニュースかしら」。夫「さあね」。

九州北部豪雨被害から十二日で一週間となった。福岡、大分両県で住民の孤立状態は全て解消されたものの、千三百人以上が避難所に身を寄せている。食中毒を避けるため、ボランティアにより加熱した食品（野菜炒め、ラーメン、唐揚げ）がふるまわれている。

うっかりミス

『おはよう日本』『ニュース7』での訂正。

×「名古屋市中心区」、○「名古屋市中区」。うっかり間違えたのでしよう。同じような、うっかりミスが多い。

×「3分2」、○「3分の2」。

×「経財界」、○「経済界」。

×「下降気温」、○「下降気流」。

×「ゲージ」、○「ケージ」。

×「協調」⇨力・心を合わせて事にあたる。「協調性を欠く」。

○「強調」⇨調子を強める。強い主張。「重要性を強調する」。意味が全然違ってきます。

×「危険障害運転」、○「危険傷害運転」。これは特にひどいミスです。

×「発煙筒」⇨煙だけ出すもの、○「発炎筒」⇨煙と火を出すもの。交通事故が多発している。『先ほどのニュースの中で、×「和菓子」とお伝えしましたが、○「和紙」の間違いでした。」「和菓子」と「和紙」では、全然違うものです。

×「いまさらてんき」、○「今空天気」。正しくは「いまそらてんき」です。うっかり、ありそ
うなミスです。

アナウンサー泣かせ

平成二十九年九月十八日、台風十八号は、宗谷海峡へ抜け、温帯低気圧に変わった。『ニュース7』の女性アナウンサーが、「先ほどのニュースで、（おじか）半島と読みましたが、（おが）半島の間違いでした」と言った。私は「そうか、牡鹿半島ではなく、男鹿半島か」と思ったが、五分もしないうちに、今度は「（おが）半島は（おしま）半島の間違いでした」と言った。三回目の渡島（おしま）半島が正しかった。私は、「こんな事もあるのか」と思った。渡島半島は読み方が難しい。北海道の地名は難しいものが多い。

「タガメ」 夫婦の会話

「タガメって知っている?」「タガメ、ミズカマキリ、水生昆虫ですな」

「タガメが空を飛ぶって知ってる?」「羽根があるから飛べます。東名高速ができた時、東名の明かりに飛んで来て、みんな死んでしまい、一挙に絶滅するくらいにまで減った。同じ原理で、誘蛾灯にも集まって来ていた。今は、殺虫剤があるから誘蛾灯は使われていない。殺虫剤により田んぼの水生昆虫は絶滅寸前です」「やけに詳しいね」

「タガメを食べるって知っている?」「タガメは、カメムシの仲間なので香りがある。東南アジアの方では食べられています」。

「タガメ」 空を飛ぶ

平成二十九年六月二十五日、NHKテレビ『ダーウィンが来た』を観る。「タガメ」の特集だ。小さい頃から田舎で育った私は、田んぼでいくらかでもタガメを観たので知っている。

羽根のあるダチョウは空を飛べないが、放送ではタガメが空を飛んだ。夜、野球場などの明かりを求めて飛んで来る。「エッ、タガメが空を飛ぶの?」私は驚いた。

タガメは、ヘビ、カエル、ドジョウを食べる。カメも威嚇する。東南アジアではタガメを食べる。香りが良いという事で、お酒やアイスクリームの香りづけに使われる。

オスがタマゴの世話をする。オスは必死でタマゴを乾燥から守る。稲田から水を引く時期、タガメたちは田んぼの隣りを流れる小川に避難して生きのびる。この小川がコンクリートになってしまうと、タガメは絶滅してしまう。すでに「メダカ」が絶滅寸前だ。

「ヘリコプター」 夫婦の会話

「ヘリコプターが一日中飛んでいるね。何かしら?」「さあね」

「早朝から、日中はもちろん、夜中も飛んでいるわ」「そうですか」。

平成三十年四月一日の神奈川新聞によると、「米厚木基地から岩国基地への米空母艦搭載機約六十機の移駐計画で、防衛省南関東防衛局は三十一日、全ての航空機部隊の移駐が三十日に完了したことを関係自治体に伝えた。移駐は昨年から段階的に進み、最後はF A戦闘攻撃機二部隊(二十四機程度)で、三月二十六日に一機、二十八日は八機、三十日に四機が岩国基地に到着した。これは米軍側からの発表で、防衛局は岩国基地における機数の状況は確認できていないとした」。「なるほど、そうだったのか」。防衛局が岩国基地における機数の状況を確認していないとは、のん気なものです。

「駄洒落」 夫婦の会話

「紅葉」の駄洒落

平成二十八年十二月十一日、朝の天気予報を観ていると、天気予報士の南さんが、「紅葉は、今日がラストなので、みんなで観に行こうよう」と言った。男性のアナウンサーも、女性のアナウンサーも言葉が出なかった。スタジオが一瞬シーンとなった。私は手をたたいて喜んだ。

早速、夫に話した。「ねえねえ、南さんが……と言ったのよ。おもしろいでしょ」「アナウンサーは、何か言わなければいけないのですか」と夫は真面目に言った。「エッ、そっち？」駄洒落は通じていなかった。

さらに、午後からの童謡の会でも話した。「今朝、天気予報士の南さんが……と言ったんですよ」と。しかし、すぐ笑った人もあったが、笑わない人も半数以上いた。「紅葉（こうよう）」と「行（い）こうよう」の説明をしても、まだ理解できない人がいた。駄洒落は、それほど難しく考えなくていいです。「紅葉の駄洒落は気楽に行こうよう」。

「水仙」の駄洒落

平成二十八年十二月二十五日、朝の天気予報を観ていると、南さんが、「寒くなり、水仙が咲き始めました。今日は水仙（すいせん）を見に行きましょう。推薦（すいせん）します」と言った。南さん得意の駄洒落だ。「決まったね」私は拍手した。スタジオは一瞬シーンとなり、男性のアナウンサーが「今日は寒いですね」と言った。

「ツクシ」の駄洒落

平成二十九年二月二十六日、南さんが自分で撮影したツクシの写真を見せて、「もう出ていました。かわいいですね。筆舌に尽きないなんてね」と紹介した。男のアナウンサーが「春も遠退く寒さでした」と天気予報をまとめた。

◆「筆舌に尽くせない」は、文章や言葉にはあらわしきれないという意味です。

「新緑」の駄洒落

平成二十九年五月四日（みどりの日）の天気予報

南さん 「この写真は私が撮って来たカエデです。今は緑色です」

アナウンサー 「いろいろな緑色がありますね」

南さん 「濃いのもあれば薄い緑もあります。よりどりみどりで」

アナウンサー 「御後おあとがよろしいようで」。

「カキ」の駄洒落

平成二十九年九月二十四日の天気予報

南さん 「アナウンサーお二人に秋を感じる写真を撮って来てもらいました」

女性のアナウンサー 「家の近くで咲いていた彼岸花です」

南さん 「これが咲くと秋を感じますね」

男性おのアナウンサー 「僕は柿かきの写真です。食欲の秋です」

南さん 「柿かきが色づいて来ると夏季かきしゅうりょう終了しゆうりょうですね」。

天気予報の裏側に感動うらがわ

平成二十九年六月二十一日、夜八時十五分から『探検バクモン』ゲストは気象予報士の南利幸さん、司会は、爆笑問題の太田光さんと田中裕二さん。出演は、サヘル・ローズさん。いざ「氣象庁」へ、天気予報の裏側に迫った。

最新技術の裏側で予報を支える、予報官たちのスゴ技を目撃。明治時代から記録されている天気図からは、歴史の意外な事実が浮かび上がった。

「二二六事件」があつた昭和十一年二月二十六日は、雪が降っていなかった。歴史ドラマでは、雪が降っていた事になっている。再現ドラマでも、庭に出た松尾伝蔵（内閣総理大臣秘書官事務取扱私設秘書・予備陸軍歩兵大佐）が、雪の降りしきる中、銃弾を浴びて亡くなるシーンがあつた。松尾大佐は岡田啓介首相とあまりにも容貌が似ていたことから、襲撃部隊は彼を総理と誤認し、目的を果たしたと思ひこんだ。松尾大佐は「岡田総理か？」と訊かれ、「そうだ」と返答していた。雪は、前日降つたが、当日は降っていなかった。残っているビデオからも、若き将校たちの行進中には雪が降っていないことが確認できる。天気図が物語る、歴史の真実が見える。

大正十二年九月一日の「関東大震災」で、焼死が多かつたのは、日本海沿岸を北上する台風に吹き込む強風が関東地方に吹き込み、木造住宅が密集していた当時の東京市等で火災が広範囲に発生したためである。大勢の人が逃げまどい亡くなった。天気図が物語っている。台風が真上にあつたら雨が消火につながつたかもしれない。

昭和十六年十二月八日、「太平洋戦争」が始まると、一般の人には天気予報が知らされなかった。天気予報は軍事機密となった。台風が知らされなかったため、避難できなかった九州・四国地方の人々は千人以上が亡くなった。知っていれば^{避害}、犠牲者は少なかったことはあきららか。

放送は、「天気予報は生活に必要な物です。天気予報が放送されないような世の中に二度としてはいけない」とまとめた。感動の天気予報の裏側ワンダーランドだった。このまとめ方は、爆笑問題の太田さんの考えが反映されているようだ。太田さんは、「すげー」「やべー」「でけー」という言葉の連発、田中さんを「てめー」「このやろう」「ばかやろう」と言って殴るのはやめていただきたい。放送中に南さんの「ツクシの駄洒落」が紹介された。この駄洒落は、私もすばらしいと思った。

感動を、翌日（六月二十二日）の「童謡を歌う会真鶴」で話した。みんなが静かに私の話を聞いてくれて、嬉しい童謡の会になりました。この日の天気予報は、一日中降水確率ゼロパーセントでした。「童謡を歌う会真鶴」は、毎回雨なので珍しい事でした。

「没イチ」の生き方

配偶者を亡くし単身となった人たちが自らを「没イチ」と呼ぶ動きが広がっている。死別の悲しみから一歩踏み出し、新たな生き方を切り開いて行こうというのだ。「おひとりさま専用旅」や「高齢者専門の結婚相談」など没イチを意識したビジネス参入も拡大している。平均寿命が延

び、人生百年とも言われる今、どのように生きて行けばよいか（NHKクローズアップ現代+『おひとりさま上等 没イチという生き方』平成二十九年六月十三日午後十時から）。ゲストは日本対がん協会・会長の垣添忠生さん^{かきぞえただお}。

アナウンサー 「十年前、奥様を癌で亡くし、その体験を著書にもまとめられている、医師の垣添忠生さん。垣添さんは、奥様の死というものをどういうふうに乗り越えてこられたんですか」

垣添さん 「私は四十年間結婚していて、子どもはいませんでした。妻の余命が三ヶ月と知った時、覚悟はしていましたが、実際に亡くなってみると、もう対話ができないということ、本当につらい、死ねないから生きているというような、そんなつらい日々を送りましたよ。特に最初の三ヶ月は、ひたすら酒に溺れて、それから家にいると涙に暮れるというような状態でしたが、一年がかりでだんだんと体を鍛えたり^{きた}、全く新しいことをして立ち直るといふようなことをやってきました」。

アナウンサー 「それは自然と、そういう力は時とともに出てきたのですか」

垣添さん 「私は一人で立ち直ろうと思っていましたので、いわゆる自分でグリーンフワークというのをやった」

アナウンサー 「グリーンフワークとは何ですか」

垣添さん 「自ら悲しみに向き合って、それに立ち向かうということでしょうか」。

垣添さん

「VTRに結婚相談・再婚がありましたけれども、私は再婚する気持ちはないんですね。妻の思い出が深く心に根ざしてますから。ただ、もし再婚されるとしたら、やっぱり相手に何かを求めるといような功利的な考え方は捨てるべきだと思いますね。つまり、料理をしてもらうだとか、あるいは自分の最期をみつめてもらうとか、そういうことは考えられないほうが、いいんじゃないかなと思います。私自身は、長く癌と関わってきましたから、癌の患者さんや家族、あるいはサバイバーを支援するような、そういう社会貢献をずっと続けていきたい、生きているかぎり、そうやって生きたいと思います。長く生きる過程をご自分の楽しみだけではなくて、やっぱり社会とのつながりでの観点からも捉とらえていただきたいというふうに思います」と。

医師としての、おだやかな発言に、私はますます垣添さんを尊敬した。私も歌のボランティアで社会貢献をして行きたい。さわやかに歌って、ほがらかに生きて行きたい。

◆平成十九年四月、国立がんセンター名誉総長になった、垣添忠生も妻を癌で亡くした。「妻の症状は、つるべ落としのように悪化していき、十二月に入るとベッドから起き上がることもできなくなりました。……年の瀬が迫るにつれ、街は華やかさを増します。夜、病院から独り帰宅するたび、世の中の人みんな幸福そうに見え、正直とてもつらかったですね。……私は癌の専門医であるのに、ただ脇で見守るだけでした」。妻・昭子さんは享年七十八でした（平成二十三年五月十六日 読売新聞『時代の証言者 がんと人生』より）。

夫は素数

「旦那さんは蜘蛛の研究をされているそうですね。どんな人か会ってみたいですね」。私が「素数（そすう）のような人ですよ」と言うと、相手は「素数？」と不思議そうな顔になり考え込んでしまった。私は、謎かけだから、そう難しく考えないでいいですと思つた。

「夫とかけて、なんとトク」「素数のような人とトク」「その心は？」「どちらも割り切れない」。素数は、一およびその数以外の数では割り切れない整数。例、二・三・五・七・十九など。あつかいにくい数です。

夫は神経質で細かい人なのか、ぼんやりしていて本当に何も覚えていない人なのか、よくわからない。私の冗談にも、まともに付き合う。あつかいにくい人です。

「散歩」の仰天

ある日、夫を気軽に誘つた。「今日は、秋晴れだから御一緒に散歩をするというのは、どうかしら。よく、前を旦那さんが歩いて、後ろに奥さんがついて歩いている御夫婦がいるでしょう。なかなか、いいと思うわ。御一緒に散歩をしましょうよ」。

すると、「いやだね。退職して家で一緒に暮らしている夫婦が、散歩の時も一緒だなんて、気がしれない。御一緒だなんて、お断りだよ」。私は耳を疑つた。そして哑然となり、言葉を失つた。深い意味はないようで、それが何より証拠には、夫は自分で言つた事を、すぐに忘れた。夕方

になると、「ご飯の支度は、まだですか」と言いに来た。

心がけていること

誠意をつくすことを心がけている

私は心がけていることがある。「失敗したら誠意をつくす」ということです。失敗をしない人間はいない。失敗をしてしまったら、誠意をつくして一生懸命やり直すのです。しかし、実際には、どんなに誠意をつくしても、失敗は取り返しがつかない。失われた時間は取り戻せない。逆回転はない。人は皆、負の感情を貯め込んで生きて行く。

新美南吉の童話『ごんぎつね』が、それを物語っている。「ごん、いたずらをして悪かったと反省して、それからは一生懸命生きたのね」。ごんは、フフフと笑ってから小さくうなずいて息をしなくなった。死骸の上には青い空が広がっていた。だれもが、すぐに「ごん」の事を忘れた。小さい一生だった。

同じ生活をする心を心がけている

童謡の会員から「いつも同じ生活をしています」と教えてもらった。「なるほど」。それで、毎日同じ生活をするように心がけている。簡単なようだが意志が強くないとできない。朝六時・起床、昼十二時・昼食、夜七時・夕食。今日のニュースをチェック、深夜二十三時五十五分、Eテ

レ『2355』を覗てから風呂に入つて寝る。

腕時計をして生活している。教員をしていた父も母も亡くなるまで腕時計をして生活をしていた。満九十五歳の二人の誕生日に腕時計をプレゼントすると大喜びしてくれたのを覚えている。

新聞を読むことを心がけている

朝六時、「うがい」をしてから新聞を門の所にある新聞受けに取りに行く。朝五時半には配達されている。冬は真つ暗だ。ゴミ集積場の古紙回収日に新聞紙を出すのは我が家だけです。簡単に道路の清掃もする。タバコが必ず一本落ちている。

昔は四社の新聞を取っていたが、今は「神奈川新聞」と「読売新聞」を取っている。読み比べると、同じ事件でも、各紙取り上げ方が違う。約三十分かけて新聞を読む。「読む力のない人は、書く力もない」と思っている。タブレット端末などでも新聞は読めるが、新聞は紙で読むのがいい。おもしろい記事があるとスクラップする。新聞を読む時間が、いろいろなことを考える楽しみの時間でもある。これほど楽しい新聞なのに、新聞を取らないのはなぜでしょう。「広告ばかりだ、新聞をやめようか」と夫が言った。新聞離れは、新聞社の方針や内容にも問題があるように思います。

平成三十年三月、神奈川新聞の『わが人生』の連載は、星椋せいまグループ会長の宮澤保夫みやざわやすおさん。「鶴ヶ峰セミナー（ツルセミ）」といえは進学塾で知られている。

宮澤さんは、中学生の時、三人の兄の議論や宮沢酒店の客の口論に耳を傾け、日米安全保障条約（安保）について解説した本を買って読んだ。そこでつかんだ結論は「安保条約はアメリカが日本を守ってくれるものではなく、日本がアメリカの防波堤になることだ」という認識だった。今までこれほどわかりやすく安保を書いた人は誰もいない。私は感動した。

◆星槎グループの「星槎」とは、「星のいかだ」。いかだで天空の星を目指すという中国の故事にちなむ。いかだは長さや太さの違う木を組み合わせた、ふぞろいの個性の集合体だ。「共に生きる」こそ、星槎の理念。

体操を心がけている

Eテレ朝六時二十五分からの『テレビ体操』『ラジオ体操』をする。台所でできるので続いている。『ラジオ体操』は小さい頃からやっているので、私にもできる。唯一できる運動といえる。得意としている。夫も気が向くと体操の集まりに起きて来る。

食事で心がけていること

肉魚の焼け焦げを食べない。熱いものを飲まない食べない。喉にくる辛い物を食べない。これは普通でしょう。

ある日読んだ料理本に「グレープシードオイル」が紹介してあった。さっそく使ってみると軽くてなかなかいい。百歳まで生きて秘訣を訊かれたら「グレープシードオイルを食べていたから

でしょう」とサラリと言う。どうなるか楽しみです。

ポカヨケを心がけている

「ポカヨケ」とは英語でもそのまま「pokayoke」と呼ばれることもある。「おもてなし」「もつたいたい」同様、世界で通用する言葉になっているそうです。トヨタの生産方式を支える考え方の一つで、うっかりミスなどを撲滅するための手法。私はこれを活用し、「品物が無くなる前に買い足す」ポカヨケを心がけている。

たとえば、マヨネーズが無くなる前に一本買っておく。たかがマヨネーズでも、野菜サラダを作ったのに、いざマヨネーズをかける段になって無いと、マヨラーとしては非常に困る。私はマヨネーズのかかった野菜サラダが大好き。「ポカヨケ」という言葉も気に入っている。

明るい服装を心がけている

病院の見舞い、老人介護施設での歌の会に行く時は明るい服装で行く事を心がけている。「黒」「紺」の服装はなるべく避けるようにしている。これは山形の義父から教えてもらったことです。平成十一年九月に七十三歳で亡くなった義母の病院の見舞いに大勢の人が来てくれて、その時の服装が気になったのでしよう。

突発性難聴で入院した秦野赤十字病院のカーテンはピンクだったし、看護婦の制服は白で清々しい。老人介護施設での介護士が付けているエプロンもピンクやオレンジ色だ。

感謝の言葉

今、自分の子育ての頃をふり返ると、平凡だけど幸せだったと思うのです。娘たちが育った田舎町は、のんびりした時間がいつまでも流れていました。その中で、のびのびと育って行きました。菜の花やレンゲ畑の向うで「お母さん」「お母さん」と私を呼ぶ笑顔の二人の声が耳に残っています。赤いスカートの姉妹です。明るい春の日差しがいっぱいでした。私を「お母さん」と呼んでくれた事に「ありがとう」と言いたい。感謝の言葉を何度も言いたい。